

シングルファザーの育児ノート

since s44.5.5～

SAMPLE

とりさん 著
サークル夢幻童

シングルフアーザーの育児ノート

(サンプル)

とりさん

※※ 以下本編より抜粋。

※ 書式は本編と同一です。あなたの環境での表示を確認して下さい。

※ 本編は全十五回。約一六〇〇〇字。

※ 本編には伏せ字等はありません。

¹ ※ 本サンプルも成人向けです。また無償ですが、特に部分を切り抜いての再配布は絶対に避けて下さ

い。

※この文章はある会員制ブログの連載を一部改訂し、作品として再構成したものである。

第一回（昭和五十五年頃）

暗くした六畳間には、カーテンの隙間から西日が差し込んでいる。

夏休みの道場の終了時間は早く、私たちは練習が

終わり、他の練習生達を送り出したあと、シャワーも浴びずに二階のこの部屋に上がり、汗みずくのからだを合わせて絡み合っていた。

雄太は五月の誕生日を過ぎて■■歳になった。肌は日本人としては白く、目はぱっちりとして大きく、頬の稜線は年齢相応に柔らかく、丸い顔をしている。

幼い頃はほとんど私の血を引いていないかに思えるほど母親に似ていた。端正で、白い肌はみずみずしく、（幼い頃から短髪を通してきたが）髪を伸ばせば少女にも見えたことだろう。

私は浅黒い肌を持ち、年齢のわりには遅いといえるが、つちりとした肉体を持ち、身長も高く、毛深くて顎髭を生やしている。似顔絵でも描くなら五角形に単純化できるような顔つきをして、眉は濃い。

雄太の姿形は、その濃い眉をはじめ、鼻のかたちやわずかな部分に、最近私の血を感じるようになってきた。

もはや少女っぽさはまるでなく、同年齢の子の中では身長は並より少し高いくらいだが、体格は少年なりにがっちりとして逞しい。だが顔のつくりの端正さ肌の白さは、やはり母親の血を濃く引いている。いつかは、もつと私に似てくるのだろうか。

私が上になつて唇を合わせ、舌をからませていた。唾液の交換をすると、私は雄太のそれを少し甘く感じる。酒は飲むが煙草を吸わない私の唾液を啜ることを、雄太はいやがらないが、その味を言葉で表現することはない。

ごろり、と姿勢を交換し、雄太が私の上になり、すぐに這いずるように雄太は姿勢を変えて、私の勃起して濡れた性器を、両手で包んで亀頭を絞り出すように指を動かして、先端を口に含んだ。

微電流が私の性器から背を通って、脳の後ろを刺

6
激した。

私は雄太の両足を少し引いて、彼のまだ幼く無毛の性器の包皮を剥き……

第二回（昭和四十四年頃）

……当時、というよりもう■学生の時分からだったが、私にはある「悪癖」があった。

その時その時の自分より年少の少年に手を出す。

性的な悪戯をする。という性癖である。

自身が■学生である頃は、例え大人に露見しても大した問題にはならなかった。「被害者」の子が「もうあの子と遊ぶな」といわれるくらいのものであった。それでも「悪い遊び」から抜け出せない下級生もいたし、それつきりになる子もあつた。

未だに不思議に思うが、玲子は私のそんな悪癖を薄々知っていたように思う。何故そんな私と、結婚するなどという冒険をしたのか、私にはもう確かめるすべもない。

結婚して一年弱で、雄太は生まれた。一ヶ月やそ

こらではわからないが、少し長ずればその顔つきは玲子にそっくりで、男の子としては美しすぎるほどだった。私はここでも、「お前に似なくてよかった」とからかわれた。

結婚してからずっと、私は私の悪癖をごく自然に封印していた。そしてそれは、妻と雄太と私、という家族の形が続く限り、破られぬ封印のように思われた。だがそうはならなかった。

妻玲子は、雄太の■歳の誕生日の直後に、あっさりとその世を去ってしまったのである。病気ではなく、交通事故だった。

何かが私を衝き動かしていた。

私は両親に援助を頼んで小さな柔道教室を開設し、その同じ屋根の下で、雄太を育てることにしたのである。

第三回（昭和四十五年頃）

……私はキスを濃厚なものにシフトしていった。
小さな口に舌を押し込んで雄太の小さな舌にタッチ

した。……雄太の口の中は狭く柔らかで、温かく甘かった。雄太は私の舌を舐め返した。

壁の周辺を二本指で軽く指圧したり擦ったりするだけだが、アナルへのマッサージもいやなものではないらしい。

……背徳の快樂が私の背中を駆け上がった。何度目かにはその小さな手を上から握り、両手で私の硬くなつた肉棒を擦らせるようにした。雄太はそれが何か新しい遊びであるかのように夢中になり、両手で私のモノをちよつとした握力で握り込んで、前屈みになつて素速く擦つた。

……

第四回（昭和四十六年頃）

私のモノは日本人としてはかなり大きい。勃起時は二十センチを軽く上回る。太さも今の雄太の手首より太い。

だから雄太は、私の腹にまたがって、両手で竿の部分を支え、亀頭の全体を何とか口に含む。そしてちろちろ口の中で亀頭を舐める。

第七回（昭和四十九年頃）

「明日からやらせてやるぞ」といい、真新しい柔道着を与えると、雄太はこれまでにないほど、飛び上がるように喜んで、そのはじけるような笑顔は玲子を思い起こさせるとともに、私の心の奥深くをズキリと疼かせた。

「雄太、立て」

はい、といって雄太は立ち上がり、柔道着の乱れを直した。

「下、脱いでみる」

雄太は少しためらったが、はい、といって下履きをパンツごと膝までおろした。小さな性器は

私はまた雄太を倒し、組み敷き、雄太が手足を自分の力で上げられなくなるまでそのしごきを続けた。

私は判断し、半端に性器を押し込んだ上体で小さく腰を前後に動かした。そして次第にその動きを速くした。

雄太は高い声をあげ続け、身を振って布団に頭を擦りつけた。泣いているような声が混じり、私はまた胸を締めつけられる感覚を味わう。

第八回（昭和五十年頃）

雄太は■学校に上がっても、相変わらずヒーローだった。体格がよく、しかも専門的に武道を嗜んでいたわけだから、同級生で彼にケンカを売ろうとする者はいなかった。雄太も暴力を嫌ったから、彼のいるところ理不尽な暴力が幅をきかせることはなかった。そうした資質や礼儀正しさから、教師や他の父兄などにも評判がよかった。

第九回（昭和五十二年頃）

互いが柔道着のまま誰もない道場に残り、雄太に自分の両足を抱えさせて上から覆い被さり、互いの汗臭さがさがさした柔道着の肌触りを味わいながら合体し

第十三回（昭和五十五年頃）

雄太は父に対する秘密を一つ増やした。

「…………大丈夫…………みたい。でもこわいよ雄太君」

続きは本編で！